

経営を圧迫する病気 その2 肺炎のお話

(有)シェパード 獣医師 松本大策

みなさんこんにちは。(有)シェパードの獣医師 松本です。この歳になって、スピード違反で赤切符をもらってしまいました。33kmオーバーで1ヶ月の免停です。とほほ。あと、罰金がいろんな人に聞いたら¥90,000 円くらいじゃないか？って言われました。ということは、キロ¥3,000円？松阪牛か、おまえはっ！ということで、みなさんもくれぐれも安全運転を心がけましょうね。

先月は、寄生虫の被害を防ぐというお話でしたが、今回は、これから増える肺炎のお話をしましょう。肺炎は、大まかにとらえると、環境的な原因、牛さんの免疫や抵抗力、ウイルスや細菌などの病原体、の3つの要因が絡んで発症します。



環境要因としては、寒さによる消耗、空気の乾燥による気管から肺の粘膜の乾燥、畜舎のアンモニアガスによる粘膜バリアの破壊、ホコリに含まれる環境細菌などのエンドトキシンによる粘膜の炎症、などが挙げられます。ですから、寒さを防ぐ、細霧装置などで乾燥を防ぐ、天井のホコリを除去する、通風を確保してアンモニアガスを除く、などの対策が必要です。



牛さん側の要因としては、導入時の群編成ストレスなどで免疫が低下しますから、その時期はとくに注意が必要です。一群の頭数を少なくすると群編成ストレスが軽くなり、肺炎の発生が減った、というケースがあります。また、ビタミンAや亜鉛が不足すると、免疫が低下するだけでなく、気管から肺の粘膜の抵抗力が低下したり、不全角化といってフケがでたように荒れてくるので、ウイルス

や細菌の感染を受けやすくなります。ビタミンやミネラルの欠乏には注意しましょう。あと、牛さんの免疫には腸管免疫機構というものがあることが深く関わっています。下痢などをさせないように腸の健康を保つのは、肺炎の予防のためにも大切なことなのです。

肺炎を起こす病原体については、大ざっぱにウイルス・細菌・マイコプラズマに分けられます。この中で、牛さんに最初に取り付いて悪さをするのはウイルスです。ですが



ら、肺炎予防の基本は「ウイルスによる発症を防ぐ」ということになります。もちろん先ほど挙げたアンモニアによる粘膜バリアの破壊も細菌感染につながりますが、ウイルスが感染して炎症が起こると、いろんな細菌やマイコプラズマが2次感染してなかなか治らない肺炎になってしまうのです。

それではウイルスを防ぐ方法ですが、まず最初に「ウイルスには抗生物質は効かない」ということを覚えておいて下さい。みなさん、風邪や肺炎のときには獣医さんが抗生物質を使うことはご存じだと思いますが、あれは細菌とマイコプラズマには効きますが、ウイルスを殺すことができません。ウイルスをやっつける薬はないのです。では、ウイルスにはどうやって対抗するかというと、牛さんの免疫で戦うしかないので、ウイルスに対して免疫を高めるためにはワクチンを使います。現在、京都微研の肺炎5種混という生ワクチンか、共立製薬のストックガード5という不活化ワクチンが入手できます。いずれにしてもワクチンを打つ前に駆虫をすませておいた方が、免疫の上昇はよくなります。それから、大切なことですが、ワクチン摂取のときは、必ず同時にバイトリルワンショット



などの抗生物質(できれば持続型)を打つようにして下さい。ワクチンを打つと、一時的に体力が低下したりして、日頃は、悪さをせずにのどの粘膜などに存在するバイ菌が暴れ出して肺炎が広がることもあるからです(日和見感染といいます)。

ウイルスの対策をしておく、万が一肺炎が出て、あとは細菌とマイコプラズマにターゲットを絞ることができるので、対策が楽です。これら細菌やマイコプラズマの対策は、獣医さんに依頼して診断的治療で探ってもらうか、鼻腔スワブという方法で細菌の種類を調べてもらえば、後は効く抗生物質を選ぶだけです。でも、僕の経験では、ウイルス対策をきちんとしておくと、ほとんど心配いらないし、ウイルス対策をしていない場合、



いろいろな抗生物質をたくさん使っても、次から次から様々なバイ菌が感染して肺炎がひどくなるケースが多いです。なかなか熱が下がらなかつたり、発症を繰り返して次第に弱っていくケースが多いのです。そういう個体を死後解剖してみると、肺がまるで



肝臓みたいに固まって、空気が入らなくなっているところが多く、また膿瘍というウミの塊があちこちにできたりしています。

肺炎は、とてもポピュラーな病気ですから、ともすれば軽く考えがちですが、僕たち獣医師にとっては、もっともやっかいな病気です。しっかり予防しておきましょうね。

